

国際協力と女性の視点

長 有紀枝

皆様、こんばんは。先ほど控え室で、東洋哲学研究所が出された論集『「女性の世紀」を創るために』（第1巻）を拝見しました。そのなかに、（研究所の創立者）池田先生ご自身が「人間の安全保障」について非常にたくさん語っておられることを紹介した論文がありました。実は、もうすぐ拙著ですが、『入門 人間の安全保障』と題した新書を出版する予定です。きょうもその追い込みをやっておりまして、改めてご縁を感じた次第です。

〈※「入門 人間の安全保障 恐怖・欠乏からの自由を求めて」中公新書、2012年12月〉

私は、創価学会の「女性平和委員会」の講演などにもよくお呼びいただきますが、いつも感銘を受けているのが、「継続」という点です。国際協力や平和に関する企画を、何度も何度も、繰り返し実行しておられる。こういうことを1回やるのであれば、わりと簡単にできるかもしれません。難しいのは、それを続けることです。「継続が何より大事」と思うのは、国際協力

連続公開講演会「現代社会と女性」

力と女性の視点

(立教大学教授、「難民を助ける会」理事長)



講演は、豊富な現場体験と綿密な研究の両方に裏打ちされて

や平和の問題は、誰かが一瞬頑張ったからどうなるという問題ではなくて、次から次へとバトンを渡すように、ほんの少しずつでも、息長く続けていかなければ、世界に平和はこないと考えるからです。また、いま平和であったとしても、世の中は恐ろしいところで、ちょっと気を抜くと、またいつ不幸な時代に後戻りしないともかぎりません。ですから、短距離走のように、いっぺんに猛ダッシュする必要はないと思いますが、少しずつ少しずつ、ほぼ半永久的に。裏を返せば、自分ができる範囲のペースでということだと思いますが、そういう「継続」が絶対に必要であると思います。その意味で、皆様に心から敬意を表したいと思います。

アメリカで知った「差別される痛み」

簡単に自己紹介させていただきます。私は大学を出てから、難民などに関係する行動を何かしたいと思うようになりました。なぜ、そう思うようになったかというと、学生時代に1年間だけアメリカに交換留学に行った経験がもとにあります。男性は、留学などをす

ると大体ガリガリに痩せて帰って来るようですが、女性はいたいいパンパンに横に広がって帰って来ると聞きます（笑）。私自身もともと顔が丸いですが、1年行つて、帰って来るころには、さらにまん丸くなつて帰つて来ました。なぜ、そんなにまん丸くなつてしまつたかという、向こうは甘いものがすごくおいしかったということ、言葉がそれほどできなかったということ。ある程度できるつもりでは行きましたが、行つてみると、全然通じませんでした。それで、「見ざる・聞かざる・言わざる」ではありませんが、食事中に人と話すのが苦痛で、ひたすら食べていたら、あれよあれよという間にそうなつてしまいました。

人と話したくなかつた理由がもうひとつあります。いまから思うと私も悪い面があつたのだろうかとかいろいろ考えますが、かなり差別をされました。私は大学のときに政治学を学んでいて、政治学を通して見たアメリカというのは「自由と民主主義」の国で、「メルティング・ポット」と言つて、人種の「るつぽ」、いろいろな人種がいる自由の国というイメージでした。

私が派遣された先は、ニューヨークやロサンゼルスのような海沿いの大都市ではなくて、内陸の中西部、インディアナ州にある人口8千人ぐらいの小さな町でした。なぜ中西部かというと、私がいた早稲田大学が「中西部は比較的、訛りが^{なま}ない」という理由で提携先を選んでいたのである。英語でもいろいろな訛りがあるんですね。日本に来た外国人でも、東北に留学された方は東北弁をしゃべるし、関西に行った人は驚くほど関西弁になります。そういうことからいうと、中西部の田舎町は、英語の発音については訛りがなくて、聞きやすい英語なのかもしれません。でも、「人種のるつぽ」という観点から言うところの「るつぽ」ではなくて、実は白一色でした。

私が留学した大学も、アッパーミドルの階層の人が多いというか、授業料も高い学校です。ほぼ100%に近いくらい白人学生が中心でした。黒人の学生はほんの少しいますが、かなり差別をされていて1カ所に固まっています。そういう中で、私は留学してすぐに、スリランカの留学生と仲良しになりました。彼女のルー

ムメイトはもちろん白人だったのですが、スリランカ人の彼女が最初にお部屋に入って、その後から白人の女性が入って来たらしいのです。そしてスリランカ人の彼女を見た瞬間に、顔色が見る見るサーっと変わっていったのがわかったそうです。そして、くると向きを変えて出て行ってしまった。しばらくして戻ってくると、机の上の教科書一式を全部持っていき、さらに小一時間して再び戻って来て、今度はダンスの中の洋服を全部まとめて、一言もしゃべらずに出て行ってしまう、二度と戻ってこなかった。要するに、部屋を変わったわけです。

日本では一般家庭であっても留学する機会は恵まれています、スリランカからアメリカに留学するのは、すぐにお金持ちの良家のお嬢さんです。彼女は怒りにふるえながら「20年間生きてきて、こんな屈辱は受けたことがない」と泣きました。

私はその彼女と一緒にいたせいかわかりませんが、差別の二重奏といえますか、どこに行っても嫌な感じでした。例えば、ホストファミリーに、彼ら

がいつも通っているカトリックの教会に連れて行ってもらった時です。教会の入口で、神父さんが一人一人とあいさつするのですが、私の順番になったら、顔色がヒューッと変わって、能面のようになったのがわかりました。まあ、ホストファミリーの手前、握手の手だけは出しますが、私のほうは見えないで、あさつてのほうを向いているのです。「あつ、聖職者でもこうなんだ」と思いました。

これはほんの一例にすぎませんが、他にもさまざまなきごとがあり、「私が、何か悪いのだ」というような思いをすごく抱くようになりました。何かあると「私が日本人だからなのだろうか」とか、そんな考えでした。同じ留学生仲間のヨーロッパから来た白人の学生に言う、「そんなの気にすることないじゃない。私は、自分の性格が悪くていじめられるなら気にするけど、肌の色とか、自分とは関係ないことで差別されるのは、気にする必要はない」と言うのです。「それは白人の発想だなあ」と私は思いました。

そのときに思い出したのは、予備校時代の恩師が同

和地区について言った言葉です。「あの人たちは、大真面目で『私たちの足が4本に見えますか』と言うんだよ。おかしいことを言う」と。それは実は、とんでもない差別表現に対するその方々の強い抗議の言葉なんです。そういうことが予備校の先生には、まったくわかっていなかったわけです。私も、そのときはよくわかりませんでした。アメリカに行って、その話をなぜか突然思い出しました。おそらく、その言葉には「足が4本なんかあるわけじゃないでしょう！ だけど、そんなことをわざわざ言わざるを得ないくらいに状況に追い込まれているんです」というような気持ちが進められていたのではないのでしょうか。私もアメリカで、ちょっと何かあると、「これは、私の肌が黄色いからだ」とか「私が日本人だから」とか思われる経験をして、初めて、いろいろな差別をされている方の状況を少し想像できるようになりました。日本にいたら、黒い髪の毛の黒い目の普通の日本人だったのが、アメリカに行くと初めて少数者という差別される立場になったわけです。

それで、「日本ではこんなことはないのに」と思つて、アメリカが嫌でたまらなくなつて帰つてきました。帰国したら、よく言う「リバース・カルチャーショック」、逆カルチャーショックになりました。つまり、それまで気づかなかったことが見えてきた。「あつ、日本にもこんなに差別があつたんだ」と、すごいショックを受けるようになったのです。

そういつたことから、「民族問題や人種問題に関わる仕事をしたいなあ」と思うようになり、外資系の企業に勤めたこともありましたが、一年で辞めて大学院の修士課程に戻りました。その後、再び企業に勤めた後、20代の終わりに「難民を助ける会」というNGOと出会ひ、そこで働くようになりました。

40歳で大学院に再入学

それから13年ほど走り回つて、かなり燃え尽きてしまつて、あるとき、派手に転んでしまつたんですね。走つていて、顔から着地してしまいまゐ、前歯4本を失つたり折つたりしました。前歯4本というのは、人

生が変わるくらいの衝撃です。血だらけで、近くの交

番までヨタヨタとたどり着くと、おまわりさんたちがわつと寄って来て「どうしたんですか！ 誰かに突き飛ばされたんですか」「いや、自分で転んで……」と言った瞬間に、さーっと皆、いなくなってしまうました（笑）。事件じゃないとわかった瞬間に。1人だけ残っていた人が、「どうしますか？ 救急車呼びますか？」「はい。お願いします」と言って、病院で脳波とかいろいろ取って、「ああ、もう帰っていいですよ」と。でも、歯は何もしてもらっていないんです。「先生、歯！」と言ったら、「あっ、歯は歯医者に行ってください」（笑）。前歯が4本、物理的になくなったり、神経がだめになったりしていましたから、私は自分で「平成の大工事」と呼んでいます、治療に数年かかりました。

そんなこともあって、これは疲れ過ぎているのかなと思い、一度「難民を助ける会」の仕事を辞めて、大学に入り直しました。それまで世界各地を飛び回っていて、いろいろな難民問題や虐殺の問題などにも直面したのですが、次から次へと飛び回って、そういう問

題を深く考える間もなかったわけです。

それともうひとつのきっかけとして、1990年代の終わりのコソボの難民キャンプでの経験があります。本当に、何も物がないんですね。それなのに、あの方たちは皆で、にこにこ笑っているんです。それに比べて、私は、とりあえず物はある。難民支援に来ている。けれども、自分の生活を見ると、夫のことはほとんど放りっぱなし。父や母ともそんなに遠くに住んでいなくてもないのに、年に数回しか会わない。大事な友達がいっぱいいるはずなのに、全然会っていない。物は私のほうが持っています。帰る国もあります。でも、人間の関係とか、一体どっちが豊かで幸せなんだろうかと思ったわけです。そういうところに、前歯を失ったこともあり、その前、コソボの地雷原で交通事故故にあつてムチ打ちになり、その後遺症に苦しんでいたこともあって、「これは、一度立ち止まって考えないと先に進めない」と思って、大学院に入り直しました。40歳のときです。

私は子どもがいませんが、40歳で大学院の博士課程

の入学式に出て、「40歳で入学式といたら、普通は自分の子どもの入学式。自分が入学してどうする」と、自分で自分に突っ込みを入れていました。でも、自分としては「もう一回勉強しなければ始まらない」と思っていたわけです。その後、大学に奉職することになり、今ではこちらが本業です。同時に、無報酬のボランティアという形ですが、国際協力にも引き続き積極的に関わっています。

「人生の本舞台は常に将来に在り」

40歳で学校に入り直した背景のひとつに、これからお話しする相馬雪香（1912年～2008年）という「難民を助ける会」の創設者の言葉があります。そこから話をしていきたいと思います。

「難民を助ける会」は、いまから33年前の1979年に、インドシナ三国から大変多くの難民の方が出て来たときにできたNGOです。相馬雪香というのは、尾崎罌堂（1858年～1954年）こと尾崎行雄の娘さんです。尾崎行雄は東京市長を長く務めて、ワシントン

に桜を送ったことでも有名ですが、その3女ですね。「難民を助ける会」をつくったのは67歳のときです。なぜこういう組織をつくらうと思ったかというと、彼女は世界中に友人がいて、スイス人の友人からこういう手紙をもらったそうです。「日本は本当に冷たい国だ。いまだくさんの難民がインドシナ三国、ベトナム・ラオス・カンボジアから日本に來ているのに、日本は何と2人しか受け入れていないではないか。なんて冷たい国なんだ」と。そう言われて、「そんなバカな」と相馬は思ったそうです。それで調べてみると、2人ではなかった。「50%違う」と相馬は言いました、2人ではなくて3人だったんですね（笑）。それで、「違う。あなたの数字は間違っている。50%も違っている」と書いたんですが、2人も3人もまあ一緒ですよ。だけれども、相馬は「日本が冷たい国だなんて、とんでもない」と。日本には古来、脈々と伝わる善意の伝統がある。「困ったときはお互いさま」という精神でずっと助け合ってきた。この精神を身近な人だけではなくて、見ず知らずの人にも広げるといいですか紹介するのだ、と言っ

てつくったのが「難民を助ける会」です。

当然、自分ひとりではできるとは思っておらず、いろいろな方に声をかけました。その中には、外務省の人もありました。外務省のかなり偉い方に、「一緒にやりましょう。やってください」という協力をお願いに行ったそうです。そうすると、「難民支援は官の仕事だから、民は余計なことをしなくていい」、こう言われたそうです。「公おおやけのことは官の仕事。余計なことはしなくていい」という考えです。いまは少し違いますが、一部にはいまもこういう考え方が残っているかもしれません。そう言われたものですから、明治女の相馬は「それから、よござんす!」と椅子をけて帰って来た。そういうことならば「もう、私たちが勝手にやりましょう」ということになったわけです。

はじめは「インドシナ難民を助ける会」としてスタートしました。一見いかかわしそうな名前かもしれませんが、相馬に言わせると「名前なんて考えているひまはなかった。どうでもよかった。インドシナ難民を助けるのだから、『インドシナ難民を助ける会』でいい

じゃないか」ということで、非常にシンプルです。大事なことをするときは、結構こういうものです。名前を考えないと始まらないというのは、何か目的が別にあるときかもしれませんね。こうして始まって、5年後の1984年にアフリカで飢餓・飢饉が起きて、アフリカにも出て行くことになりました。そのときに、「インドシナ」を取って、今日の「難民を助ける会」という名前に変えています。

その相馬がいつも大事にしていた言葉があります。父・尾崎罌堂の言葉なのですが、それを相馬は「難民を助ける会」をつくるときに実践したのだと思います。それは「人生の本舞台は常に将来に在り」という言葉です。

これをいつ尾崎が語ったかという点、95歳まで尾崎罌堂は生きて、ほぼ生涯現役に近いかたちで政治家として活動していましたが（1953年まで63年間、衆議院議員）、70歳を過ぎて、遊説しているときに大病をしました。出先で、死ぬか生きるかの状況になったそうです。そのときに、病床に伏せりながら、過去の思い出

が走馬灯のように蘇って、尾崎はハタと気づいたそうです。

それは、「人間というのは一日一日進歩している。十年前よりいま。昨日よりもきょう。きょうより明日」。そして、「一日一日進歩していって、その人にとって、いつもいまが最高点である。ならば、死ぬ瞬間が、人生の最高の到達点のはずだ」と。ということは、何歳になっても「常に将来が本舞台」であると。これを20歳の人が言っても、「そりゃそうでしょ」という感じでしょうが、70歳を超えた方が、死にそうな病床で「あつ」と気づいたという。それだけに、この言葉は本当に重みがあると思います。

※1935年刊の著書『人生の本舞台』にはこうある。

「人間は、齢を重ねれば重ねるほど、其の前途が益々多望なるべき筈はずのものだと云ふのが、私の最近の人生観である。人間に取っては、知識と経験ほど尊いものはないが、此こゝの二つのものは年毎に増加し、死の直前に二つ共最も多量に蓄積された時期である。故に適当に之を利用すれば、人間は、死ぬ前が、最も偉大な事業、

又は思想を起し得べき時期であるに相違ない」「六七十歳までの間に、蓄積した金銀財宝を、子孫にも譲らず、社会にも寄付せず、之を焼き棄てて、隠退する人があったなら、世間は、之を何と評するだろう」「知識経験は、金銀財宝よりも貴い。然るに世間には、六七十歳以後は此の貴重物を利用せずに隠退する人がある。馬鹿や狂気者以上の『たわけもの』ではあるまいか」「此の信念を推究すれば『人生の本領は未来に在り』と云ふ事になる。言い換へれば『昨日までは、人生の序幕で、今日以後が其の本舞台だ』と云ふ事になる」。尾崎

罌堂全集第9巻所収

「人生の本舞台は常に将来に在り」。この精神で、相馬は67歳で「難民を助ける会」をつくつたのです。

「民主主義」だから「国民に責任がある」

相馬は2008年に亡くなりましたが、本当にいろいろなことを教えてもらいました。特に印象に残っていることのひとつに、こんな話がありました。相馬の母親は、イギリス人とのハーフです。ですから、相馬

にはイギリス人の血が4分の1流れていて、家でも結構英語を使っていたということです。尾崎罌堂は、相馬が子どものころは政治などで忙しくてほとんど家にいなかった。それで、相馬はいつも「なぜ、お父様は家にいないの？」と文句ばかり言っていたそうです。そうしたら、テオドラさんというお母さんが「お父様は Righteousness（ライチャスネス）のために働いているのだから、寂しいけれど我慢しましょうね」と言っていたそうです。「Righteousness」は「right」という単語の名詞形で、「正義」とか「公正」「道義」という意味です。

相馬はまだ小学生くらいで、Righteousnessの意味はよくわからなかったけれど、何かとてつもなく大切なものなんじゃないかと子ども心に思ったそうです。「だったら、文句を言うのはやめよう」と。

晩年になってもよく、「誰が正しいかではなくて、何が正しいかでしょ。お偉いさんが言ったから、それが正しいなんて思っちゃダメ。何が正しいか、自分の良心で判断しなさい」とか、「最近の日本人は品性がない。

どうやって品性とか品格を高めたらいのかしら」、あるいは「徳をもっと広めたいの。徳を広めるにはどうしたらいいかしら。あなたも協力してちょうだいね」、そういうことをいつもしゃべっていました。きつと、子どものころの「正義とは何だろう」という思いと、強くつながっているのかなと思います。相馬が難民の支援をしようと思ったのも、そういうことの延長であったのではないかと思っています。

それから、「民主主義」というのを、すごく大事にしています。いつも「民主主義が大事、大事」と言っていて、常に「民主主義って、何なの？」と私たちに問うわけです。私も一応、政治学科卒業ですので、試験の答案なら書けたかもしれませんが、真正面から相馬先生に「民主主義って、何よ、あなた」と問われると、「えーっ」と口ごもってしまう。そのときに相馬が言ったのは、「民主主義というのは、一人ひとりが大切这件事情のことよね。もうひとつは、民主主義というのは一人ひとりが自分の頭で考えるということでしょ、あなた」と。たしかに、そういうことですよ。民主主義、

「民が中心」ですから、何も考えずに、上から言われたままとか、政治家に言われたまま、それに従うのだったら、それは民主主義ではないはずです。私たち一人ひとりが自分の頭で考えて行動しなければならぬ。

93年でしたか、相馬は「ニュースステーション」というテレビ番組に呼ばれました。まだ久米宏さんが司会をやっているところです。そのころは相馬と、三木睦子さん、加藤シヅエさん、「平成の三婆」と言われた強烈な方たちですが、70代から90代までの三人のお婆様が「日本の浄化運動」——汚れてしまった日本の政治を変えようということで日本全国を行脚しておられた。その活動が番組で紹介されたのです。そうして、キャスターの久米さんが相馬に對して、「（政治腐敗は）政治家を選ぶ我々にも責任があるということですね」と言ったときです。

生放送でしたが、相馬はテーブルをバンと叩いて、「違います。我々『にも』じゃなくて、我々『に』責任があるのです」と一言。久米さんも「おおっ」という感じになりました。

「日本を世界の孤児にしたくない」

相馬の思想のもうひとつの原点は、第2次世界大戦に日本が突き進んでしまったことを尾崎行雄が本当に悔いていたことです。尾崎の主張は「日本が世界の孤児になってしまったから、ああいふ戦争になってしまったんだ。二度と、日本を世界の孤児にしてはいけない」というものでした。相馬は「難民を支援するのは、もちろん難民に幸せになってもらうただけでも、同時に日本を世界の孤児にしないための支援なんだ」ということを、よく申していました。

また、その関係で「日本をマルタ島のような島国にしよう」ということも発言していました。マルタ島をご存じですか？ 私も行ったことはないのですが、地中海に浮かんでいる小さな島国です。日本とは置かれていて環境が全然違うので一概にはできませんが、島国ということでは同じです。だけど、同じように四方を海に囲まれながら、発想が反対だそうです。日本は「海で世界と隔たっている」と考えますが、マ

ルタ島では「海を通じて世界中とつながっている」と考えるのだそうです。同じような条件でも全く別の発想ができるということです。ですから、相馬は「日本を世界の孤児にしない」ということと、そのために「マルタ島のような『外向きの島国根性』に変えていこう」ということを、いつも語っていました。

また、これは個人的なことですが、相馬に言われたことでもうひとつ心に残っていることがあります。私はこの20数年間、国際協力に携わってきて、地雷の廃絶活動などもやりましたから、テレビや新聞で紹介していたことがあります。そういうのに出ている際に、ボランティアのおば様から「偉いわねえ」と、ほめられた時です。相馬が来て「ちよつといらっしゃい」。「何かお小言だなあ」と思ってたけど、「あなた、まさか自分が偉いなんて思っていないわよね」と言われて、「いいえ、とんでもないことです」と首を振りましたが、「偉いのは、あなたじゃなくて、あなたのご主人よ」と言われたんですね。私は「はあ？」という感じで、「だって、うちの主人はサラリーマンだし、普通

に生活していて、海外の危ないところに行っているのは私なんですけど」と思ってたわけです。

でも相馬は「あなたね、誰のおかげで、そんなところに行けると思ってるの？ それはご主人に理解があるからよ」。そう言われてからもう10何年たちますが、いまならわかります。いまの私は、若いスタッフに「ちよつといらっしゃい。あなた、勘違いしたらだめよ。私は相馬先生に言われたんだけど、ご家族の支えがあるから行けるんだからね」とか、偉そうに言っています。

後から知りましたが、相馬は東北の旧・相馬藩（相馬中村藩）の相馬家当主に嫁いだわけです（1937年、相馬恵胤氏と結婚）。それまで、お母さんが半分イギリス人、お父さんの罍堂ものすごくリベラルな自由人で、女性だからと差別を受けたことなど1回もなく、自由奔放に育ったわけです。ところが、縁あって相馬家に嫁ぐと一変しました。家は東京にありましたが、福島 of 相馬家に帰ると、何と男性陣と一緒に席では御飯も食べられない。ちゃんと畳の上で食べるのは一家の男性

だけで、女性陣とお手伝いさんは、男性が終わってから別の間で食べるというのです。

こういうことは相馬にとっては大ショックだったよ
うで、そういうなかで、お姑さんからも、いじめられ
てと言うと語弊がありますが、価値観がまるで違った
わけです。代々お殿様の家系だった家に、尾崎家とい
う戦争に反対して国賊と呼ばれたりする家から嫁いだ
わけですから、それはそれは苦勞したということを、
後から聞きました。

私が「難民を助ける会」に入ってすぐのころですが、
ご主人は病気で入院しておられて、相馬は泊まり込ん
で看病していました。ご主人は（1994年1月）80歳
で亡くなられたのですが、葬儀を一通り終えて、本当
に悲しみの中でしたが、「難民を助ける会」にも相馬は
出て来ました。そのときに何と言ったかという、「私、
これからどこでも行けるから」と宣言したんですね
（笑）。「もう、どこでも行くから」と言って、実際にそ
れから、戦争が終わって間もないカンボジアとか、80
代の相馬が、かなりいろいろなところを歩きました。

さすがに90歳になってからは海外にバンバンというわ
けにはいきませんでした、それでも行っておりま
した。

相馬は96歳まで生きましたが、長生きの秘訣という
ことで思い出すのは、常に怒っていたことです。常に
何かに怒っていて、お孫さんたちから「ブー婆」、相馬
の説明では、ブーブーうるさいババアで「ブー婆」と
言われていたそうです。あと、お肉をよく食べていま
した。一緒に食事をして、顔が顔面神経痛で揺れた
り、手が震えたりしていましたが、それでも残さなか
ったですね。私はあまり肉食ではありませんが、大事
かもしれないと思ったりしています。

こういう出会いの中で、私のNGOでの国際協力が
始まりました。ちょっと前置きが長くなってしまいま
したが、きょうの「国際協力と女性の視点」というテー
マに関して、「難民を助ける会」という組織を始めた相
馬雪香という女性がどういう人だったのかをわかって
いただきたくて、少しご紹介させていただきました。

「名誉の殺人」と「ダウリー殺人」

実際の現場のお話に入っていきたいと思います。世界の女性が置かれている現状についてです。

先ほど控え室で、東洋哲学研究所の代表がマレーシアに行つてこられたとうかがいました。マレーシアはイスラム圏でありながら、女性が社会的にも影響力をもっているというお話でした。イスラム圏でもそういう国がある一方で、そうではない国もたくさんあります。最近、新聞・テレビで、パキスタンの女の子が「学校に行きたい」と言っただけで、銃で頭を撃たれ、重体で入院しているというニュースをお聞きになった方もいらつしやると思いますが、そういうお話がたくさんあります。

〈※パキスタンの15歳の少女、マララ・ユスフザイさんが、女性が教育を受ける権利を否定するイスラム武装勢力を批判したところ、2012年10月、銃撃された。イギリスで治療を受け順調に回復していると報道されている〉

「名誉の殺人」という言葉があります。これは、女性に殺されるのですが、何のために、誰が殺すのか。名誉のために殺されるんです。誰の名誉のためか。家族の名誉です。これは実際に、パキスタンの私の友人から聞いた話です。その友人の知り合いに弁護士さんについて、事務所、若い女性の離婚の相談に乗っていた。その最中に、いきなりドアを蹴破^けって男が入って来て、何も言わずに、その女性を撃ち殺して、いなくなってしまった。これが、ストーリーとか、別れたくない旦那さんが殺し屋を雇ったというような話であれば、日本人でも想像できる話かもしれませんが、違うんです。男を雇ったのは、彼女の両親なんです。なぜかというのと、女が自分から離婚を申し出るなんてあり得ないことで、その家の恥だという考えなんです。その家としては、そういうとんでもない娘は始末しないかぎり、家族が周り中から差別されるわけです。ですから、家族の名誉を守るために娘を殺す。

「名誉の殺人」というのは、アフリカや中近東でもあります。例えば、結婚していない女性が妊娠してしま

った。これは、日本では想像できないほど重大問題になります。「だったら、その人と結婚すればいいじゃない」と思われるかもしれませんが、そういう問題ではなく、とにかく未婚の状態で男性とそういう関係をもってしまったということが許されないわけです。そういう場合、大体、殺されてしまいます。家の中で、家族に。家族会議などでそういうことが決まるわけです。お父さん・お母さんは直接には手をくみださず、お姉さんの旦那さんとか、家族だけでも血がつながっていない人たちが、火をつけたりする。それで大火傷を負って亡くなるとか、こういうことが、この世界でいままお実際に起きているのです。

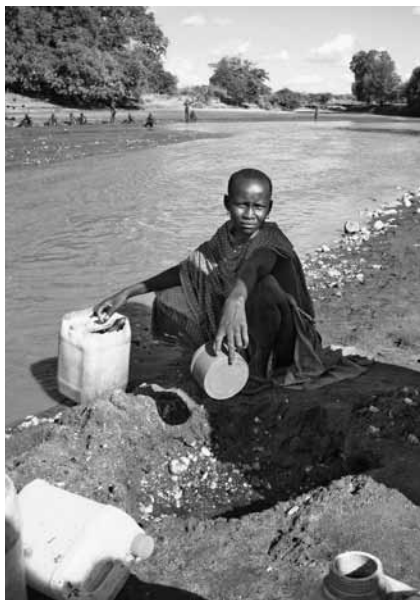
インドには「ダウリー」(タヘーズ)という風習もあります。花嫁の父親が相手の男性に払う持参金や持参品のことです。この持参金が少ないと殺されることがあるんです。「ダウリー殺人」といいますが、本当にいまでも起きています。妻を殺してから、再婚してまた「ダウリー」をもらうという男性が少なくない。殺さなければ、いじめ抜いて自殺に追い込んでしまうこと

もあります。家に逃げ帰ったら、今度は家の者に殺される女性もいます。

先ほどの「名誉の殺人」もそうですが、これで問題なのは男性が捕まらないことです。一応、表向きには、こういうことを禁ずる法律はあるのですが、「あの人が犯人」とわかっていても、誰も捕まえない。こういう現実があります。

「水を得る」それだけのために

それから、極度の貧困の中で女性が大変な思いをしている例が無数にあります。例えば、「難民を助ける会」が活動している南スーダンの話です。南・北スーダンで私たちは何をしているかというと、子どもたちが地雷の事故に遭わないように、地雷の回避教育をし、それから井戸を掘っています。井戸を掘るのは、もちろん水がないからです。もともと、あまり水がないところに、気候変動などが加わって、川などがどんどん干上がってしまい、水源が近くにないのです。人間は水がないと生きられません。先進国では、蛇口をひねれ



ば水が得られます。あるいは水道がなかった時代でも、日本は水が豊かだったので、川がすぐ近くにあるとか、井戸の水がすぐ出るとか恵まれていたわけですが、スーダンでは掘っても、なかなか水が出ないのです。

そのため、遠くの水源まで、水を汲みに行かなければならない。どれくらい遠いかというと、大体片道1時間ならいいほうで、小学生くらいの女の子がてくてく歩いて行くわけですから、片道2時間が普通です。これが、たまに皆でハイキングに行くというのなら、2時間歩いても楽しいかもしれませんが、炎天下で毎日、片道2時間。しかも帰りは、持っていったポリバ

水汲みをする南スーダンの人たち（ともに2006年）。「難民を助ける会」では、南スーダン共和国（2011年7月にスーダンから独立）の東エクアトリア州で、2006年から水・衛生の事業を実施し、これまでに102基の井戸と6つの給水システム（給水塔から水道管で水を引き、複数の水栓所で蛇口から水をとれる）を設置してきた。同地域では長い間、安全な飲み水も医療施設もないために、下痢やマラリア・腸チフスその他の感染症などで、多くの人が命を落としてきた（写真提供…AAR Japan「難民を助ける会」）

ケツに水をいっぱいに入れて歩いて帰るわけです。私なんか、買い物で1リットルとか2リットルの水を持って帰るだけでもいいですよ。10分くらいの距離を2本持つだけでもいいですよ。自転車を使いますが、女の子が10何キロの水を持って歩く。しかも、1回で足りないときは2往復するわけです。そうすると、水を汲んで帰って来て、もう1回行って帰って来て、それだけで1日8時間。本当に水汲みで彼女の昼間の時間は終わります。その水で、家族全員が暮らすわけですから、やるしかない。もちろん、他の家族は別の仕事をしているわけです。そういう状況で、「子どもが学校に行けないのはおかしい」と言ったら学校を作っても、彼女たちは通えないわけです。水がないと、家族が生活できませんから。

これだけでも大変な話なのに、実はもっと危険がいっぱいなんです。日本だったら、お母さん・お父さんは、子どもの交通事故の心配をしますが、ここでは交通事故故はない代わりに、他の危険がある。どういう危険かというと、貴重な水をよその村から取りに来るわけ

すから、水場の争いがあるって、見せしめのために子どもが性的に虐待されているのです。敵と見なして、殺すまではいかないけれども、もう来ないようにするために、水を汲みに来た子を襲ってレイプしてしまう。そういう危険があるとわかっていても、水がないと生きていけないから行かなければいけない。これは、いま現在進行中の話です。そういう子どもたちが、同じ時代に生きているのです。そういうところ、井戸を掘ると、いままです片道2時間かかったところが30分になる。そうやって初めて、学校に通うとか他の話にも進めるわけです。ということで、「難民を助ける会」では南スーダンで井戸を掘っています。

私も、この水汲みの少女の話は、どれほど考えても、頭ではわかっていても心ではなかなかわからないというところがあります。私は特別ぜいたくをしているとは思いませんが、例えば、ハンカチを買いに行ったら、「赤と黄色、どっちしようかしら」とか、そんなことで悩む。そんな先進国の私たちの生活がある一方で、水を汲む、それだけのために、自分の心に一生残る傷を負う子ど

もたちがいるわけです。それも、昔の話ではなく、いま、同じ時代にいるわけです。そういう子たちに、いったい何ができるのだろうか、いつも考えています。

そういう子たちにとって、学校へ行くというのは義務ではなくて、まさに特権中の特権なんですね。それを私たちは忘れてはいけないかと、すごく思っています。

10億人もの女性が暴力の被害に

次に、紛争下の暴力についてお話しさせていただきます。

拙著『入門 人間の安全保障』でも引用したのですが、アフガニスタンで援助活動をされていた山本芳幸さんという国連におられた方が紹介されていた話です。

アフガニスタンのバルワン県から逃げてきた、ひとりの女性の実話です。

「私は二人の赤ん坊の母でした。夫は死に、私以外に誰も赤ん坊の面倒を見る者はいませんでした。まだ二人の赤ん坊が寝ている、ある寒い日の早朝、いつものよ

うに私は家に鍵をかけ、朝食のパンを買う長い列に並ぶために出かけました。突然、軍用ジープが止まり、二人の男が私を中に引きずり込みました。私は狂った女のように叫びましたが、まだあたりは暗く誰もいませんでした。私はその後気絶したと思います。目を覚ますと、銃を持ったたくさんさんの男に囲まれていました。

私は汚いマットレスの上に寝かされていました。男たちは次から次に私を強姦しました。私はずっと私の二人の赤ん坊のことを考え続けていました。何日間そこに閉じ込められていたのか分かりません。何日も何日も同じことが続きました。でも私の頭の中は二人の赤ん坊のことを考えることだけで忙しかつたのです。何日そこにいたか思い出せません。ある晩、彼らが私を通りに捨てた時、私は立つことができませんでした。私はゆっくりと這って家の方に向かいました。二人の赤ん坊は死んで凍っていました。飢えて死んだのか、寒さで死んだのか私には分かりません。」（山本芳幸『カブルー・ノート 戦争しか知らない子どもたち』幻冬舎、2001。Afghan Women's Network in Islamabad and Peshawar 編）

Search of Peace : Afghan Women's Diverse Voices Against Violence、
から山本氏訳)

これは1993年頃の話だそうですですが、いまでも、こういうことが世界中で起きています。国連事務総長の報告によりますと、世界の3人に1人の女性が、レイプや性差に基づく暴力の被害にあっている、その数は10億人。中でも、紛争下における女性への性的暴力の問題は、世界中で長らく問題視されています。

私は、地雷問題に関わってきましたが、「地雷禁止国際キャンペーン」という運動があります。この運動と、初代コーディネーターのジョディ・ウィリアムズさんが、1997年にノーベル平和賞をもらいました。その後、彼女は、ノーベル平和賞をとった女性たちによる「ノーベル・ウィメンズ・イニシアティブ」という組織をつくり、「紛争下の女性に対する性暴力を防止する国際キャンペーン」という運動を始めています。

彼女を今年の6月に日本に招いて、いろいろお話をしたときに、なぜ、彼女がこういうことに関心をもったかを教えていただきました。ジョディ・ウィリアム

ズさんは、大学を出てからエルサルバドルで難民の支援をしていたこともあり、それから地雷禁止の活動へ入っていくわけです。私は彼女を15〜16年以上知っていますが、今年初めて彼女の口から聞きました。いままでは、ブライベートの話かもしれませんが、仕事の話は地雷問題とか難民問題とかが中心で、そういう女性問題を彼女の口から聞いたことはありませんでした。実は彼女自身がエルサルバドルで性暴力の被害にあっているんです。*sexually assaulted*、「性的に暴力を振るわれた」という言い方でした。彼女がそのことを語るまでに20年以上たっています。

「いままでは地雷のことや、クラスター爆弾の問題をやっていた。それらはもちろん大事で、やり続けるけれども、紛争下の女性の性暴力という問題を、いま何とかしなくてはいけない」。彼女はそう決めたわけです。日本に来たときに、いろいろな方から同じ質問を受けていました。「こういう問題は、いまに始まったことではないし、人類の歴史とともにずっとあった。どうして、『いま』するんですか」。彼女は「だって、『いま』

しなくちゃ。これだけ大変なことがあるのに、何も変わらない。変わっていない。だから、できるときに、誰かがなくてはいけない。『何で、いまか』とか、そんなことは関係ない』と。多分、彼女にとつては絶対に「いまがその時」なんだと思います。

これは、この問題に限らないと思います。自分の生活や利害とは直接関係がない『おおやけ』の問題に取り組むのに、決まったタイミングってないですよ。これは皆さんが地域とかで活動される場合もそうだと思いますが、やり始めるタイミングは人によって違うはずだし、他人から、「いまよ!」と言われても、それを感じるのは他人ではなくて自分です。それぞれの人に、タイミングがある。ある人は15歳かもしれないし、ある人は96歳かもしれない。相馬の場合は67歳でした。また、どの問題かということも、人によって心にカチつとはまるテーマは違いますよね。それでいいと思います。皆が一斉に同じテーマにカチつとなったらこわいし、食べ物に好みがあるように、皆さん、きょうもさまざまな色のお洋服を着ておられ、お顔がそれぞれ

違うように、髪型が違うように、自分の心に響いて「あつ、これなんかしなきゃ」と思うテーマは、人によって違う。やれるタイミングも違う。それで、ジョディにとつては、「いま」今年だったんです。

大震災——「女性は大丈夫?」

次に、女性という観点から、東日本大震災のお話もしておきたいと思います。私はほとんど海外で活動していて、東北は旅行で行ったことがあるだけでした。育ったのは茨城なので、東北ではありませんが、文化圏としては近い部分を感じています。

東日本大震災が起きたとき、私は「難民を助ける会」とともに、「ジャパン・プラットフォーム(JPF)」という日本のNGOと経済界と外務省が一緒になっている組織の代表(共同代表理事)をしていたのですが、これはすぐに行かなければと決めました。私たちは国際協力の団体ですが、海外の難民を助けるためにだけできた組織ではなくて、困った人を何とかしたいということでできた組織だからです。また、難民支援で海外

によく行くので、うちのスタッフが言ったのは「東北ならパスポートも要らないし、飛行機のチケットも取らなくていい。通訳の心配もしなくていいし、予防接種も要らない。すぐ行けます」。そう言って、本当にすぐに行きました。

最初に、障害者の方たちの支援活動をしました。が、そうこうしているうちに、先ほど申し上げた「地雷禁止国際キャンペーン」でジョディの後に、二代目のコディネーターを務めたリズ・バーンスタインという女性から「有紀枝、大丈夫？」というメールが入りました。彼女はカンボジアやアフリカの途上国でたくさん活動してきた人です。彼女に「私たちはいま東北で活動している」と伝えたら、「女性は大丈夫か？」といきなり言ってきたのです。

私は、彼女ともそういう話をしたことはありませんでした。地雷の問題で知り合っているの、例えば地雷の話とか、いかに自国の政府に働きかけるとか、という話をしていたので、世界中から来るお見舞いメールのひとつだと思ったんですね。たくさん仲間が「日

本、大丈夫？ 頑張つて」というメールをくれた。だけど、彼女のメールはちょっと違っていて、「女性は大丈夫か？」でした。そのとき、私は、よくわかっていなかったんですね。「日本だから、大丈夫」と答えてしまった。

彼女に「なぜ、そういうことを聞くのか」と聞きましたら、アメリカを襲ったハリケーン・カトリーナでニューオーリンズの町が滅茶苦茶になりましたね（2005年夏）。彼女は出身地ではないけれども、ご両親が定年退職してニューオーリンズに家を買って住んでいる。それで、ハリケーンが来てから2週間後に両親のところに行つたけれども、とんでもない状況で、両親はすべてを失った。メールが来たときは、それから5年以上たつていたわけですが、「ニューオーリンズは、いつぐらいから復興したの？」と聞くと、「復興なんかしていない」と言うわけです。そして、「若い人は違うかもしれないが、うちの両親の人生は、あそこである意味、終わってしまった。もちろん生活はしているけれども、失ったものが余りにも大きくて、新たに動き

出すことはできていない」。それが答えでした。そしてさらに、「ハリケーン・カトリーナのときは、女性がすごく大変だった」と。

このリズという女性は途上国に長くいたので、私は「それはバングラデシュの話じゃないの?」というような感じで聞き流していたんです。まだそのときは地震が起こって1ヵ月たたないうちだったので、女性うんぬんというよりも、どうやって皆に1日1日を暖かくして生きていていただুকみたいな話の時期ですから、ピンとこなかったんですね。

そうこうしているうちに、だんだん現地から聞こえてくる話では、やっぱり女性が大変らしい。

例えば、生理用品。1日に5枚か6枚使うわけですが、生理用品自体は援助物資としてかなり倉庫にあっただんです。だけど、それを実際に配ったのは自治体の男性職員、若いお兄さんだった。何をしたかというところ、1パック単位ではなく、その中の1枚ずつ渡したんですね。1日5〜6枚使うものを1枚1枚、若い女の子に手渡して、「無くなったら言ってください」(笑)。私

なら、もう来年で人生50周年ですから、くささいと言えるかもしれませんが、うら若い女性が、若いお兄さんに「無くなったからください」とは、ちょっと言えないですね。だから、物が倉庫にあるということと、実際に被災者の手に届く、使えるということは別問題なんです。

下着の問題もありました。これも年配の方から聞きましたが、下着もいろいろなサイズが送られてきた。男の人が「好きなサイズを持ってください!」と言う。なかには堂々と「私はLサイズよ」と言っていて、気にせずにもらっている人もいます。そういう「ちょっとはできない人もいます。そういう「ちょっとした配慮があれば」という話がたくさんあって、いま申し上げたのは氷山の一角です。

長いこと、お風呂にも入れず、お化粧どころか、顔も洗えなかったりする。そういう状況が続いて、ある女性の団体が「せめて気分だけでも上向きになってもらえれば」と願って、小さな手鏡とリップスティックを配る運動を始めました。女性は口紅をすると、安ら

ぎや元気が得られるとされているんですね。それなのに、ある被災者用住宅を管理しているおじ様が怒ったんですね。何と言ったかというと、「寝た子を起こすようなことをするな」と。「いま非常時なんだから。非常時で皆が頑張っているときに、口紅なんか配ったら、寝た子が起きてしまうじゃないか」と。それは違うだろうと、女性ならわかりますよね。そういうような話ですが、たくさん起きてきました。

また、被災地で「絆」ということが強調された。これはすごく大事なことです。別の側面もありました。DV（ドメスティック・バイオレンス）、家庭内暴力からやつのことで逃げ出して別居できたという若い奥さんがいました。ところが、震災で家が全部流されてしまうと、自治体から割り当てられる仮設住宅は一家にひとつなんです。そもそも数が不足していて、仮設になかなか移れない人がいるわけですから、DVで離婚調停中の相手から逃げているから2つ割り当てますということにはならない。その結果、やつと別々に暮らせたのに、また一緒にさせられてしまった。それも、

1部屋しかない狭い住居です。そこでまたDVが復活して、さらに苦しい状況に置かれるということがありました。

災害時、女性の被害と負担が大きい

いま「災害とジェンダー」の関係について、研究がたくさんあります。専門家の先生にいろいろ話を聞きますと、先進国でも途上国でも、世界的に共通する特徴が4点あるそうです。

第1に、全世界的な傾向として、「被害に男女差がある」。男性よりも女性のほうが多く犠牲になっているということです。日本の場合は、女性の人口が若干多いので、それに起因するのか、別の理由かはわかりません。バン格拉デシュの場合は、専門家である静岡大学の池田恵子先生によりますと、災害が起こったら、親は男の子から先に逃がすそうです。女性の社会的・経済的地位が低くて、「男の子がいてこそ」という社会ですから、なにはともあれ命を助けなきゃと逃がすのは男の子。女の子は、お母さんたちを手伝って、家の中の

事な物を持って逃げなければならぬ。その結果、逃げ遅れて、より多く犠牲になっているというのです。

2つ目は、災害のときには、ジェンダーに基づいて役割分担が強化され、「女性の労働負担が増す」。これは日本でもそうだったと思います。もともと漁師町とかだと、男の人は外に漁に出て、女の人は家のことをするし、漁の手伝いもする。男の人は、漁ができなくなっても家事はしない。だから、女の人はずっと働いている。災害の場合も、自分自身も被災している女の人が、避難所の皆のために、ご飯を作っているわけです。普段でも、例えばお葬式の手伝いみたいなことを延々とやっていたら、相当大変ですよ。それを、自分自身も被災している女の人がやり続けるということが、日本でも起きています。そういうふうに、女性の労働負担が増す。

その上、いろいろな援助物資とか復興資源を手に入れるのも女性のほうが難しくなると言います。これは世界中で起きていると思います。これはちよつと笑いかたの話のようですが、日本の自衛隊の方から聞いた本当の

話です。大震災で、「トモダチ作戦」として米軍から支援がありましたね。その時のお話です。この自衛隊の方は、自分は英語がちよつとできるので、米軍との連絡係となった。そうすると、食料などを持って来てくれる際、受け取る時間と場所がいつも合わないのだそうです。さんざん打ち合わせをしているのに、時間と場所を守ってくれない。最初は、日本人らしく、相手を責める前に自分を責めて、「ああ、俺の英語がまずいからだ」と思ったそうです。「俺の発音が悪いから」と思って、今度は口頭ではなく、書いて渡した。それなのに、守ってくれない。アメリカ人というのはこんなにルーズなのかと思って、相当注意したけれども、やっぱり守ってくれない。「一体、どういうことなんだ!」と、支援に来てくれる人に悪いけれども、とうとう文句を言った。そうしたら「わざとやっている」と言われたんだそうです。「はあ?」とびっくりして、「わざとやっているって、どうして?」と聞くと、「お前たち日本人は知らないかもしれないが、自分はインドネシアとかスリランカとか、いままで水害、災害に見舞

われた場所にいったい行って見てきているんだ。決まった場所に決まった物を持って行ったら、男が全部持って行ってしまうじゃないか。力の強い者が全部独り占めにしてしまう。だから、お年寄りとか女性とか子どもが取りに来られるように、わざと約束しない。突然現れて、その場にいる人たちに気づいてもらうようにして配っているんだ」と。

そこで、「ちょっと待ってくれ。日本はそんなじゃない。みんな譲り合っているんだから」と言って、実際に避難所に来てもらったそうです。そうしたら、小さい子を先頭にして、弱い人から先に渡していた。それを見て、米軍の人が、「おおっ、映画みたいだ!」と言って感動した(笑)。日本人にとっては普通のことでも、「わあ、映画の『タイタニック』みたいだ」と言っていたそうです。ですから、このアメリカ人が見てきたように、女性や子どもは後回しで、力の強い男性が援助物資を持っていってしまうという状況が、実際に起きているんです。

3番目の特徴ですが、災害後というのは「女性への

暴力が増加する」。そういう傾向がやはり世界的にあるそうです。人権が守られにくくなる。だれもが異常な神経の状況に置かれていて、多少の人権侵害があっても「これは平時じゃないんだから」ということなのかもしれません、そういう傾向が強くなる。

最後の4つ目は明るい話です。「女性は、災害の危険やリスクを減らすために多くの役割を果たし、回復力ももっている」という点です。回復力というのは、いま流行りの言葉で「レジリエンス (resilience)」という言葉がよく使われます。災害になったときに耐える力、そこから回復しようとする精神力、抵抗力、復元力、それは女性のほうが強くもっているのではないか、そう言われています。

東日本大震災でいろいろなことを思いましたが、そのひとつは、自分がこういう女性の問題に対して無知だったなあということです。私自身は、女性だからと差別されたことはなかったんですね。女ふたりの姉妹で、お祖母さんが「女に学問は要らない」と言っていたわりには、両親は教育熱心で、進学したいと言った

ら行かせてくれました。「そんなの必要ないのに」と、ちよつと嫌みくらいは言われましたが、女だから行つてはいけないとは決して言われなかった。また、国際協力の分野は大体、女性が強いです。

でも、今回、東北の方の話を聞いていると、ほぼ同年代の人が「私は、女だから上の学校に行つては行けないと言われた」と言うんです。昔ならそうだったでしょうが、私と同世代の人がそうだという。その種の話がたくさんありました。あるいは、親が離婚したために片親で、中学を出てすぐ働いている女の子たちがいて、本当に貧しいにもかかわらず、生活保護など公的支援を受ける方法があるということすら知らない。困った場合には助けてくれる社会の仕組みがあるのに、その存在を知らないわけです。一方で、余裕があるのに、そういう制度を悪用する人もいます。当然に支援を必要とする人が知らないで、苦しんでいる。若い女の子にそれがすごく多いという話を聞きました。

こういう現実にあふれて、私は、不謹慎かもしれませんが、「自分はマリー・アントワネットか」と反省しま

した。マリー・アントワネットは、フランス中が苦しんでいて食べるものがないときに、「パンがないなら、お菓子を食えばいいじゃない」と、本当に言ったかどうかはわかりませんが、そう言つたとされています。パンがないというのは、本当に食べるものがないことだけれども、恵まれているから、そういう状況が想像できなかった。私も、頭では「女性は大変なんだ」とわかっていても、本当には全然わかっていなかったと痛感したのが、東日本大震災での経験でした。これからも支援は続いていきますが、そういう私自身の「気づき」を多くいただいています。

女性に本当に「平和の性」なのか

次は、「女性は平和の性なのか」というお話です。

ジェンダーという言葉をよく使いますが、生物学的な男女の差であるセックスに対して、社会的・文化的な性差とか性の有りようのことですね。実は、最近、それをすごく意識する出来事がありました。私は子どもはいないので、代わりに犬が2匹おります。そのう

ちの1匹がこの7月に15歳で亡くなってしまいました。かなり衝撃を受けて、最初は泣き暮らしていました。こんなにも喪失感があるものとは知りませんでした。それで耐えられなくなつて、普通は1年くらいそういうことはしないと思いますが、1カ月たたずに、また子犬を飼つてしまいました。メス犬です。それまでは、子どものころ家にいた犬も、結婚してから飼つた犬も、全部オス犬で、生まれて初めてメス犬を飼つたわけです。

「かわいい女の子」の子犬だと思つて、ペットショップで手に入れたのですが、これが、外見とはまるで違つて、もう「凶暴」なんてものじゃないんです(笑)。まだ生後数カ月であるにもかかわらず、もう1匹のもうすぐ10歳になろうかというオス犬の耳に噛みついて、血を出させたり。私は耳学問で、赤ちゃんを育てるときに、男の子は病氣しやすいけれど、女の赤ちゃんは丈夫に育つなんて聞いたことはあるので、そういうことなのかとも思いましたが、それだけでは説明できない激しさなのです。私はその犬が普通に歩いている

姿さえ、あまり見たことがないですね。いつも全速力でビュンビュンと走っては体当たりして(笑)、新聞とかも紙吹雪になつて散るくらい、足で掘つてしまふ。「ちよつと、この子どうかしているんじゃないか」と思うくらいなのですが、だんだん私は「これが本来のメスの姿なのかもしれない」と考えるようになりました。他の動物、例えば熊とかでも、お母さんが自分の子どもを守るときなんか相当に強いですよ。

そういう経験が最近あつて、私は「ああ、これがジエンダーか」と思い至つたんですね。つまり、「女の子だから、もつとおとなしいはず」という思い込みがあった。それは文化的に私たちが一方的に思い込んでいるだけなのですね。まあ犬の話を人間に当てはめてはいけないと思いますが、我が家のメス犬はいまも日々凶暴でありまして、その姿を見ながら、「社会的・文化的につくられた性差にとらわれていた」と気づいたわけです。

平和の問題にしても、よく、このように言われます。「戦争を起こすのはいつも男であり、戦うのも男で、悪

いのは男である」「女は産む性であり、母の性であるから、常にそういう殺戮には反対し、平和を望むものだ。だから、女性の力で、世界をもつと平和にしよう」——これはもちろん、非常に大事なメッセージです。それは間違いないのですが、実際のところ、本当に女性性が「平和の性」と言い切れるでしょうか？

ルワンダの大虐殺について、ご存知でしょうか。いまから18年前の1994年のことです。94年の4月から7月の約百日間、3ヵ月間で、少なくとも80万人が虐殺されたと言われています。80万人——想像もつかない数ですね。

ルワンダは、かつてベルギーの植民地でした。主にツチとフツという2つの民族がいて、もともととは両方とも仲良くというか、普通に共存していたと言われています。ところが、ベルギーが植民地支配したときに、わざと両者の違いを際立たせるようにしました。フツのほうが人口が多かったのですが、少数派のツチの人たちを重用して、ツチを通じてフツの人を治めるようにしたわけです。こういう間接支配は、インドでもイ

ギリスが行ったし、フランスの植民地だったベトナム・ラオス・カンボジアなどでもそうです。フランス人は直接支配するのではなくて、3カ国の中でベトナム人を一番優遇して、ベトナム人を通じてカンボジアやラオスを支配した。その結果、ラオスとカンボジアの人は、植民地にしたフランス人のことよりも、ベトナム人が嫌いになっていった。支配されている側の恨みつらみが、フランス人ではなくてベトナム人に向かったわけです。単純化してお話しますが、ルワンダでも同じようなことが起きて、ベルギーも、フツの人を支配するのに人数の少ないツチを重用した。それで、フツとツチの間に反目がつくられていったのです。

そして、植民地ではなくなり独立したときに（1962年）、今度は、より人数が多いフツのほうが政権をとった。それに対して、ツチの側も抵抗し、長い間、抗争が続きましたが、（1990年以降に）とうとう内戦状態になってしまった。そういう中で、国連などが間に入って「和平合意」ができました（93年）。これでやっと戦争が終わると思ったわけですが、フツの中には納

得しない人たちがいました。双方が戦争に疲れ果ててからの「和平合意」ではなかったし、国際社会が間に入って「和平合意」にもっていったら、負けそうだった人は喜ぶかもしれませんが、勝っていたほうは、「よいけいなことをしなければ、我々が勝っていたのに、よってたかつて無理やり停戦にさせられた」と思ってしまう。そのようなことがルワンダでもありました。「和平合意」ができたけれども、フツの側は全員が賛成ではなく、強硬派と穏健派に分かれ、穏健派が「和平合意」を結んだわけです。フツの強硬派の人たちには、それが許せなかった。

そんななか、和平合意を結んだ穏健派の大統領が乗った飛行機が撃ち落とされるという事件が起きます（94年4月6日）。犯人はいまも不明ということですが、「ツチがやった」ということにされてしまい、その日から虐殺が始まったのです。暴徒化したフツ強硬派が、ツチと穏健派のフツを殺し始めたのです。

最初に誰が誰を殺したかというと、フツ強硬派がまず同じフツの穏健派を殺したのです。戦地でよく言わ

れることですが、私たち援助団体よりも、戦争をやっている人のほうが「何をする」と戦争がより悪化するか」を知っている。あるいは、「誰が平和をつくろうとしているか」をよく知っている。その平和をつくろうというほうの芽を、彼らは摘んでいくわけです。ルワンダでは、フツ強硬派が、まずフツ穏健派の政治家のリーダーから殺していった。ツチを殺すのが目的だけでなく、その前に、同じ民族けれども、和平を実現して戦争をやめようと思っている人を殺していったのです。

フツ穏健派の後に、ツチの人を殺し始めますが、その前に国連のPKO部隊として、ベルギーから来っていた兵士10人を殺してしまいます。その結果、PKOのベルギー部隊の撤退が決まり、もともと少なかった国連の兵士はほとんど数が減って、その間に大殺戮が始まってしまった。3ヵ月で80万人が殺されます。主に誰がやったかというと、恐ろしいことに政府がやっているわけです。そのときはフツが政権を握っていたので、フツの政府、フツの軍隊が虐殺をしていた。最

初は政府軍、それから民兵など一般の人も実行しました。

では、一般の人は男だけなのか。ここで『アフリカンウォッチ』というNGOが出したレポートを紹介したいと思います。英語で「Not So Innocent」。イノセントというのは潔白、純真無垢ということですから、「そんなに純真ではない」。副題は「When Women Become Killers」——「女たちが殺人者になるとき」。つまり、「女性たちは、そんなにイノセントではなかった」というレポートです。このルワンダの虐殺において、女性も殺人に加わったということです。では、その女性というのは、貧しくて教育も受けていなかったりして、比較的、煽動されやすい人たちだけがやったのかというと、違います。大学の教員もやりました。政治家もやりました。音楽家もやりました。教会のシスターもやりました。母親たちもやりました。要は、あらゆる層の女性が虐殺に加担しました。もちろん、そんなことをやらなかった人もいたと思いますが、教育を受けていようがいまいが、子どもがいようがいまいが、聖職

者だろうとそうじゃなろうと、あらゆる層の女性がやったんです。それが「Not So Innocent」というレポートです。

ですから、女性といっても、そういうことは起こり得ます。悪いのは男だけで、女性はいつも平和的だと主張することはできないというのは、こういう歴史が証明しているかと思っています。

※大虐殺について、長講師には、『スレブレニツァあるジェノサイドをめぐる考察』（東信堂、2009年）の著書がある。ボスニア紛争末期の1995年、10日間で7500人とされる「第二次大戦後、欧州最大の虐殺」が、ボスニア東部の町スレブレニツァで起きた。その背景とプロセスを解明し、将来のジェノサイドの予防についても真摯に考察した研究書である。

リベリア女性の「非暴力の知恵」

最後は、女性の平和活動について、力強い例をお話として終わりにしたいと思います。

昨年（2011年）の「ノーベル平和賞」の受賞者を

ご存じでしょうか。3人の女性がもらいましたね。そのうち、リベリアの女性が2人受賞しています。リベリアの女性大統領エレン・サーリーフさんと、リーマ・ボウイー（レイマ・ボウイ）さんという1972年生まれのまだ若い女性です。

リベリアは、アフリカからアメリカに連れて行かれた奴隷が、アフリカに帰ってきて造った国ですが、近年、2回の内戦が続きました（1989～96年／99年～2003年）。そういう中で、リーマ・ボウイーさんは、戦争で心に傷を負った兵士のカウンセラーとして働き、元少年兵の面倒を見ていたそうです。そうこうしているうちに、内戦がいつまでも終わらないので「何とかしなくてはいけない」というので、立ち上がります。まず、魚市場で働く女の人たちが、市場で働きながら、歌ったり踊ったりしての平和アピールを始めました。ここから、彼女の「平和のための女性リベリア大衆行動」がスタートします。さらに、リーマさん自身はキリスト教徒ですが、運動をイスラム教徒にも広げます。イスラム教徒とキリスト教徒の宗教間対立は激しかった

のですが、そういう中で、彼女はイスラム教徒の女性と一緒に祈り、意気投合したというか、女性同士の連帯として、宗教に関係なくつながろう、とにかく戦争をなくす非暴力の抵抗運動と一緒にやろうと呼びかけたのです。

この運動では、参加者が皆、白いTシャツを着ているのですが、彼女たちがやった方法がユニークでした。皆、お金がないので知恵をしばって、あの手この手を考えたわけです。

なかでも有名なのが、女性による「ストライキ」です。戦争に抗議して、「セックス・ストライキ」をした。戦争に関わるようなボーイフレンドや夫とは一切そういうことはしませんと。戦争ばかりしている男たちに対して、女性が皆、そういうかたちで強く抗議をして、これは効果をあげたそうです。

ほかには、隣の国ガーナで開催された和平交渉の場に、代表が乗り込んでいった。彼女たちは、非暴力は非暴力ですが、やることは大胆というか、自分の国の大統領とか調停に來た隣国の大統領とか、偉い人たち

がたくさんいる部屋に鍵をかけて、閉じ込めてしまうんです（笑）。そして、「交渉が始まるまで、外に出しません」と。銃を持った人には「撃つなら、私たちを撃つてから行きなさいよ」とか言う。和平交渉の場で、銃なんて撃てないです。そうやって、その場に皆で座り込みながら、交渉を見守ったわけです。こうされたら、もうどうしようもなくて、和平交渉が進んだのですね。

こういう運動が認められて、「ノーベル平和賞」に輝きます。彼女たちのすごいところは、自分の国だけよければいいというのではなくて、「アフリカは皆さようだいだ」として、紛争で苦しんでいる国が周りにあるときに、同じ手法でやっていこうと、どんどん出て行って、アフリカ中に運動を広げていることです。

「あきらめない」 かぎり 「負け」 はない

きょうは「国際協力と女性の視点」ということで、皆様が期待されているお話ができたかどうかわかりませんが、国際協力は女性だけでは、もちろんできない

です。だって、半分は男性ですから。冒頭でお話ししました相馬は、実はいわゆる女性運動は一切やっていなかったです。「そんな、女だけでやっても、しょうがないじゃない」というのが相馬の口癖で、やるときは男も女も関係なく皆を巻き込むのだという感じでやっていました。

ですから、きょうお話したように、国や地域によって違います、あるところでは女性が本当に大変な立場に置かれています。また、それを逆手にとって、知恵を使って、上手にやることも可能です。紛争地とか被災地はもちろん大変な状況に置かれています、それ以外の場所でも、それぞれの問題を女性が抱えているわけです。でも、大事なものは、あきらめないこと、現状の苦しさには負けないことだと思います。何か精神論みたいに聞こえるかもしれませんが、勝ち負けというのは、いま直ちに決まることではないのであって、長い目で見ていけば、どんな状況にあっても、女性の視点は生かせると思いますし、あるいは男性の方々と協力して、それができると思っています。

私の大学での恩師、故・鴨武彦先生は、人生の勝負ということについて、「ケンカの勝ち負けって、誰が決めるんだ。周りが決めると思ってるんじゃないか。そうじゃない。勝ち負けを決めるのは、自分なんだ」という言い方をしていました。たとえ皆が皆、「この人の負け」と思ったとしても、本人が「負けてない」と思っていれば、その勝負は終わっていない。いつ勝負が終わるかという、周りが「この人は負け」とか「この勝負ついた」と思ったときではなくて、負けたと思われている本人が、「あつ、これで勝負が終わった」と

思ったときに終わるんだと。反対に言う、どんなに負けが込んで、「まだ、この勝負、終わっていない」と思っているかぎり、その勝負は続いていくわけです。

なにことも、思う通りにいくこともあれば、いかなることもあります。紛争地でもそうだし、日本も、平和であっても、いろいろな問題があります。そういう問題に皆さんが向かっていくときに、「この勝負、終わっていない」と思うかぎり、終わっていないんだとい

うことを、改めてメッセージとしまして、話を結びたいと思います。

〈質疑応答〉

【会場からの質問①】 お話の中に、女性に対する性的な暴力ということが出てきましたが、男性として耳の痛い思いをしました。女性を支配するには、やはり暴力が手っ取り早いというか、「男のほうが強いんだ。力があるんだぞ」と見せつけたいという動物的本能が、すごく働くのかなと思いますが、この点、いかがでしょうか。

【長講師】 私の最近の経験では、女も十分動物的だということ、が、メス犬を見てわかりました（笑）。

そうですね。やはり、本当に幸せな人はそういう行為をしないのではないのでしょうか。そういう行為に走ってしまう男性自身の多くが、無理やり兵士にさせられたとか、きつい状況に置かれていたという一面があると思います。

例えば、南京大虐殺の加害者の男性たちについて、いろいろな研究が進んでいます。日本軍の中でひどい暴力が及びこつていて、兵士自身が上から下に、ものすごい暴力を常に振るわれていたとか、兵士は十分に食べるものもなく、現地に着いたら好き放題やっていいと言われていたとか、つまり兵士自身が非人道的な状況の中に置かれていたということです。

もちろん、だから何をやってもいいというわけでは絶対にならないわけですが、人間というのは、極限状態に追い詰められたら、どんなことでもしてしまう危険性を秘めていると思います。ルワンダの場合もそうですが、女性もそういう状況に置かれたら、暴力的になる可能性はある。

「いや、私はやらない」という方もおられるでしょうが、私は自分も加害者になるかもしれないと思って、こわいです。どんなに立派な人でも、そういう暴力の渦の中に入ってしまったら最後、そうなる可能性はあるのではないのでしょうか。だからこそ、大事なのは、戦争を起こさないことです。

災害でも、防災が重要です。最近の統計で、「防災に1ドル投資すると、災害後の7ドル分の価値がある」という話があつて、災害が起きた後にどんなに援助をするよりも、災害を起こさないほうにお金を使ったほうが、よっぽど効果があるとされています。紛争も全く同じで、いかに起こらないようにするからです。これも相馬の口癖ですが「政治家なんかに、まかせちゃいられない」。政治家だけにまかせて、どうなるものでもありません。私たち普通の市民一人ひとりが「戦争に向かつてしまったら、終わりなんだ」という思いで行動する。冒頭も言いましたが、1回だけ活動すればいいというのではなくて、細く長く、自分の生活でできる範囲で、そういう危ない方向へ社会が行かないように努力していく。それが大事なのではないかと思えます。

【会場からの質問②】きょう、お話を聞けて、すごくありがたかったです。こういうようなお話を、もっと多くの皆さんに知らせる機会がほしいと思うのですが、

情報を伝える場合、受け取る側によつては、ゆがんで伝わってしまう可能性もあるのかなと思います。情報を知らせるということに対して、先生はどのように感じていらつしやいますか。

【長講師】たしかに、伝えるって難しいことです。大学で授業をしていて、学生にコメントを書いてもらったカードを回収するのですが、「あれっ？ 私はそんなこと言ったかな」とか、ちよつと言っただけのジョークを授業内容のすべてだったかのように書く人がいたりして、驚くことも少なくありません。そうかと思うと、ちゃんと理解している人もいます。要は、受け手によつて違うと思います。

情報のこわさということで言えば、先ほどのルワンダの例だと、なぜあんな虐殺が広がったのかという理由のひとつに、マスコミの情報操作が指摘されています。ラジオが「ツチのやつらはゴキブリだ。ゴキブリだ。ゴキブリを殺せ」という内容を延々と流し続けた。それで、皆が洗脳されたように動いてしまった。だから、誰が言ったとかではなくて、自分の頭で判断する努力

が大事です。

ともかく、正しい情報を正しく伝えるというのは、至難のわざです。兄弟姉妹とか親子とか夫婦とかの一番近い間柄であっても、年中、誤解ばかりですよね（笑）。私の学生時代、文化人類学の先生が言っていました、「国際理解の基本は何か。国際理解で一番大事なこと、それは、あきらめの境地になることだ」（笑）。そもそも理解し合うのは不可能だということから出発せよと。「理解し合えて当たり前」ではなくて、「それは不可能なんだ」というところからスタートする。男と女の間にも深い溝がありますが（笑）、人間同士の間で、深い溝があつて当然というところから始めて、だからこそ言葉を尽くしていく。これが大事だということです。

だから、ちよつと話して、話を通じなかつたとしても、「あの人はだめだ」と決めつけたり、「私の言い方が悪いんだ」と落ち込むのではなくて、「今回は通じなかつた。じゃあ、次はどういうふうに話そうか」と。そういうように、通じないとか誤解があるということを大

前提に、努力を続けていけばいいのかなという気がしております。

（おさ ゆきえ／立教大学教授、
NPO法人「難民を助ける会」理事長）

（本稿は2012年11月27日、東京・新宿区の
日本青年館で行われた講演をまとめたものです）